オネェ様、事件です！！

神崎亜美

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
オネェ様、事件です！！

【Ｎコード】
Ｎ２０１７Ｖ

【作者名】
神崎亜美

【あらすじ】
あの時俺がシラフだったら、こんな事にはならなかったのに。
裏社会で生きることになった青年アルフレッドが、インテリヤクザ本田が経営するいかがわしい店で、先輩オネェ様たちに可愛がられながら、借金返済に奔走する。
話のリクエスト等随時受け付けます。

第一話／幕開け（前書き）

全ては、あの晩始まった

第一話／幕開け

アルフレッドが人としてあるまじき額の借金を背負ったのは、不運としか言うほかないだろう。彼に非はないのである。
二週間前のことだ。ひとりで飲んでいた彼に、相席を求めてきた男がいた。勿論アルフレッドは喜んで席を勧めた。男もまた飲んでいたが、彼には目の前の酒よりも気にかけている物があるようだった。アルフレッドは正義感の強い若者だった。だから彼は聞いたのだ。
「何か悩みでもあるのかい？」
と。男はおどおどとした様子で、実はと言った。
「実は、その……お金を借りていて」
「借金かぁ。俺の周りにはそんなにいないけど、やっぱり大変かい？」
「合法的なところから借りられたら良かったのですが、僕の場合は、なんというか……」
「サラ金？」
「……もう元がいくらだったかも分からないくらいで、妻にも出て行かれてしまい、支えもないままこの有様です」
言いながら泣き出した男。アルフレッドはその男が哀れに思えてならなかった。アルコールで感受性が強くなっていたのかもしれない。
「せめて……」
男が情けなくしゃくりあげながら呟いた。
「せめて誰か、保証してくださる方がいれば、その人のために頑張ろうと思えるのですが……」

最悪だ。
「ふふ、よくお似合いですよ、アルフレッドさん」
鏡の前に立った彼の後ろで、その男は笑った。鏡越しに睨んでも、

その笑みは崩れない。
男の名は本田菊。本名かは定かではない。年齢不詳の優男で、サラ金や風俗店から元締め料をとっている、いわゆるヤクザだ。
目の前の醜態に、顔が熱くなる。それもその筈だ。彼は今、女物の青いドレスを着ているのだから。
「よく鍛えていらっしゃいますね。肩幅はありますが決して見苦しくない。顔もお綺麗ですし」
こんな格好を、しかも強制させた男に褒められても全く嬉しくない。
「もう一度確認しますが、」
そう言って本田は何かのメモを開いた。
「これからあなたには私の店で、保証人として負われた１３８６万円、耳をそろえて返すまで働いていただきます。宜しいですか？」
疑問形だったが、答える権利はなかった。

あの晩男と何を話したか、酒のせいでよく覚えていない。
気づいたときには自室のベッド。時計の時間は八時半。水でも飲もうとキッチンに立ったとき、そのインターホンは鳴った。扉の前に立っていたのは、面識のない背の低い日本人の男だった。
「朝から失礼いたします。アルフレッド・Ｆ・ジョーンズさんで宜しいでしょうか」
物腰が丁寧で、柔らかい笑みが特徴の青年だった。
「そうだけど、俺に何か用かな？」
「えぇ。少しお付き合いいただきたいのですが、今からでも構いませんか？」
「ん、あぁ。着替えてくるからちょっと待っててくれるかい？」
そう言って彼はＴシャツとジーンズに着替え、ジャケットを羽織った。髪を手でとかしながら再びドアを開ける。
「お待たせ」
「いえいえ。では参りましょう」
本田のあとについてマンションの下に降りていく最中、アルフレッ

ドは小柄な背に尋ねた。
「俺に用って何だい？」
彼は振り返らず答えた。
「その件については、車内でお話しいたします。どうぞ」
しかし、アルフレッドはマンション前の車を見て、思わず足を止めた。停められていたのは、黒塗りの高級車だった。
嫌な予感に思わず後ずさる。本田がゆっくりと振り返った。
「どうぞ。……それとも荒々しく攫われる方がお好みですか？」
その低い声に、アルフレッドは車に乗るほかなかった。
車内は二人だけだった。ハンドルを握るのは本田。アルフレッドはただ後部座席で身を固くしているだけだ。
「もっとくつろいで下さって良いんですよ？」
本田が無茶なことを言う。反論しようにも声が掠れそうだ。
「それで、肝心の用件なのですが」
彼の肩がわずかに跳ねた。
「昨晩あなたが保証人になられた方と連絡が取れないのです。もうかれこれ六時間になりますか」
「……」
アルフレッドは何もいえなかった。酔った勢いと相手への哀れみから保証人になり、翌朝には借金をそのまま肩代わりする羽目になった。あの時自分がシラフだったらこんな事にはならなかった、と後悔しても仕方がない。
「自宅もすでに引き払われていて、僅かにあった預金もきれいに下ろされていました。どういうことか、ご理解いただけますか？」
「俺に……払えって？」
「いかにも、その通りです」
「……い、いくら？」
「額にして１３８６万円になります」
言葉が出なかった。
「そんな大金……」

「お支払いいただきますよ」
有無を言わせぬ口調だった。アルフレッドは底冷えするような恐怖に、手が震えているのが分かった。
「紙幣でお支払いいただけないなら」
本田はミラーに映るアルフレッドに一瞬だけ目を向けた。
「その身体でお支払いいただくまでです」

車はどこかのビルの地下駐車場に入り、その少し先にあるドアをくぐった。自分よりも小柄で、この場における絶対的な権利を握っている男が恐ろしかった。
頭の中では車内で言われた言葉が反響し続けていた。
身体で支払う。本田は確かにそういったのだ。何をさせられるのか、想像したくもなかった。前に読んだ小説のワンシーンに、今と似たものがあったのを思い出しかけたが、すぐ頭から振り払った。
「こちらです。まずはお支払いの方法からお決めいただきます」
本田がドアを開け、中に入るよう促した。「……」
「どうぞ、お掛け下さい。そちらは空気とでも思っていただいて結構ですので」
部屋の四隅に控えていた黒スーツの『その筋らしい』男達に、アルフレッドはぎこちない動きで椅子に腰を下ろした。伏せた目に映るのは、膝の上で情けなく震えている自分の手だ。
「顔を上げて下さい。何も取って食おうというのではないのですから」
その声に僅かな苦笑が混ざっていた。どうせここはもう相手の懐の中だ。どうあっても何かを変えられる筈がない。
だがそうは言っても、素直に現状を受け止められるほど彼は潔くない。そんな心境を察してか、本田が再び口を開いた。
「ご心配なさらず。彼が酔っていたあなたを狙って保証人を頼んだのは、見当が付きます。少なくとも、彼の身辺にあなたの名はありませんでした。ならばそう考えるのが普通です。非は彼にあるよう

なものですので、無理に命を取ったりは致しません」
アルフレッドはようやく顔を上げ、向かいの椅子に座った本田を見た。
「さて、」
彼はまた笑った。
「私共はこの世界では、それなりの信用を置かれています。なので先ほど申し上げたとおり、ある程度は命の保証も可能です。その上で１３８６万円お支払い戴くには、ある程度条件が絞られてきます。この金額が自分で蒔いた種なら、腎臓なり肝臓なり眼球なり、取れるだけ取って、どこかに売り飛ばしてしまえば済む話ですが」
サラリと恐ろしいことを言われた。思わず自分の肩を抱く。本田は押し殺したような笑いを漏らした。
「そういったことは致しません。まぁ、ご本人が希望されるなら別ですが」
「……まさか」
「なら結構です。それでは私からの提案ですが」
「……身体で？」
「えぇ。働いて返していただきます」
笑顔でそう言われた。
「さっき言ってたみたいに、どこかに売り飛ばされるのかい？」
「そうしたいですか？」
逆に問われ、まっぴらだと首を振る。
「ならばこその提案です。私の店で働いて下さい」
「……店？」
「えぇ。物好きな殿方を相手に接待をする店、とでも言いますか」
「……そこなら、構わない、いえ、是非そこでお願いします」
つい下手に出てしまったが、後悔はしていなかった。店の趣旨がそれなら、自分の役はボーイだ。以前バイトで経験があるから――
そこまで考えたところで、本田は立ち上がった。それなら、とアルフレッドの手を取り部屋から出ていく。

「今からでも店に向かいましょう。ドレスのサイズがあれば良いのですが、きっと平気ですね」
「……はい？」
今、何か三文字ほど分からない言葉が聞こえた気がした。
「あの、今何て」
困惑した彼の声に、本田が振り返って答えた。
「あぁ、申し訳ありません。私としたことが大事なことをお伝え忘れていました」
そのあと聞こえた言葉は、幻聴だと思った三文字が現実だったと思い知らせるのに充分すぎた。
「当店で接待をするのは全員男性です。そして私はその支配人、本田菊と申します。以後お見知りおきを」

第一話／幕開け（後書き）

やっちまった…

まさか古典のテストの落書きからここまで話がくるとは。なんて恐ロシアな想像力。

作者が未成年なので、基本シゴト的な描写は入れない予定です。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2017v/

オネェ様、事件です！！

2011年10月8日12時20分発行